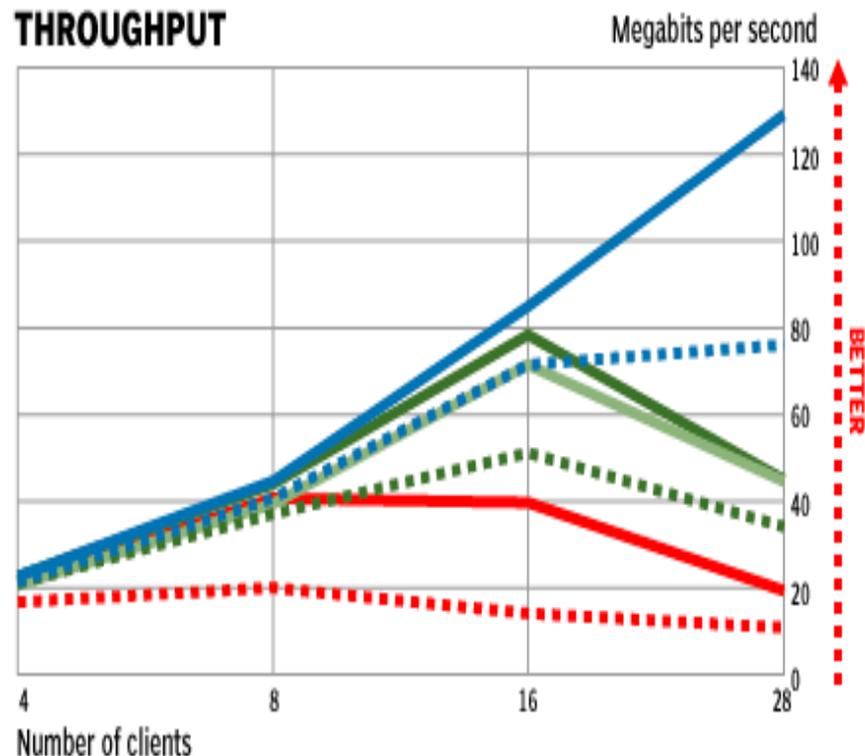
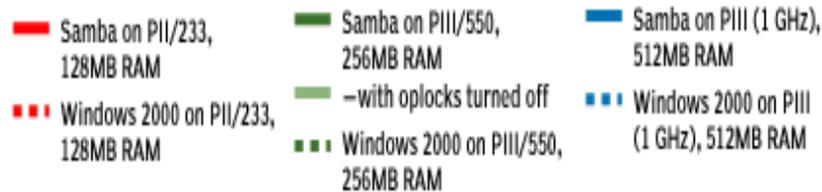


Sambaによる大規模システムの構築

Linux & Sambaを利用するメリット



- OSが安い
 - Windows 2000: 1サーバ 15万円 ~ 70万程度
 - LINUX: 1サーバ無料 ~ 数万円
- クライアント台数に比例したライセンス料が必要ない
 - Windows CAL: 1ユーザ 2000 ~ 6000円
 - LinuxにはCAL必要なし
- 信頼性が高く、連続運転に強い
- 性能が良い

Sambaで大規模システムを構築する際の問題点

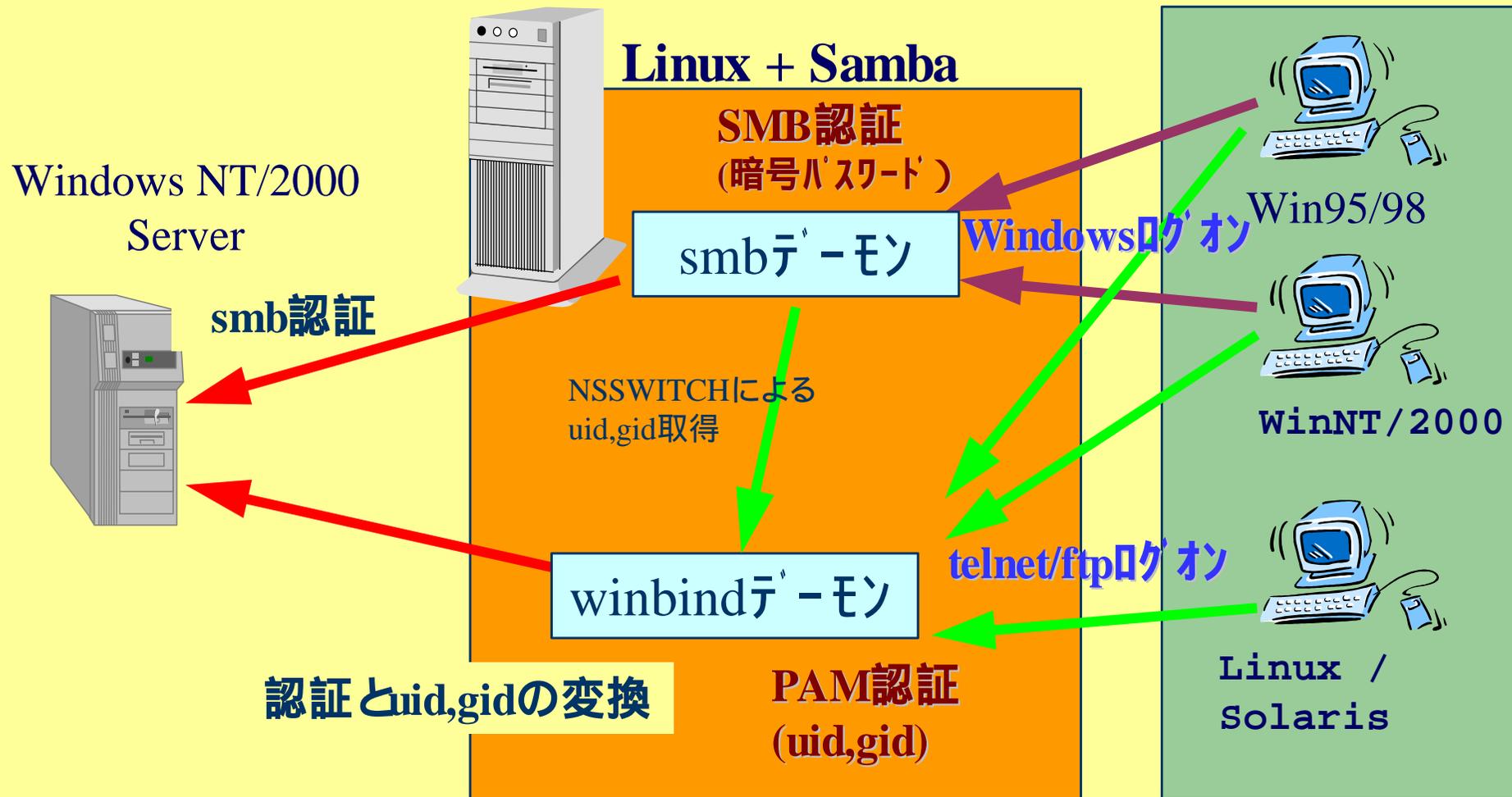
- 複数のSambaサーバを運用する場合はLinuxユーザのアカウント(uid,gid)の管理・統合ができない。
- Sambaユーザはsmbpasswdやpasswdなどのテキストファイルで管理されるため、ユーザ数が多数になるとユーザ検索がボトルネックなる。
- ドメイン構造がフラットで階層構造にできない
- Samba 2.2.3aからSambaをBDC（バックアップ・ドメイン・コントローラ）にすることが可能になったが、ユーザ情報を複製する機能をまだ備えていない。そのためPDC障害時のユーザ情報が失われる可能性がある。

問題解決のための2つのアプローチ (その1: Winbind機能を使用する)

- Windows NT/2000サーバがPDCとしてドメインが構成されている場合にのみ採用可能。
- Sambaサーバが複数台になってもユーザ管理は1台のWindowsのPDCで操作すれば良い。
- Windows 2000サーバのActive Directoryを使用すればユーザ管理ドメインをツリー構造にでき、大規模ユーザシステムを構築できる。
- ただし、専用のオプション(--with-winbind)でコンパイルする必要があるので標準のSambaパッケージでは利用できない。

Winbindによるユーザ管理機能

- ユーザ管理はすべてWindowsサーバで行う



問題解決のための2つのアプローチ (その2 LDAP機能を使用する)

- SambaサーバをPDC/BDCとしてドメインを構成する場合に適している。Sambaサーバが複数台になってもユーザ管理は1台のLDAPサーバに対してのみ行えば良い。
- ユーザ管理ドメインをツリー構造にでき、大規模ユーザシステムを構築できる。(可能なシステム規模はLDAP製品の性能に依存する)
- LDAP製品としてOpenLDAP, IBM SecureWay, iPlanet Directory, Novell eDirectoryなどが利用可能
- ただし、専用のオプション(--with-ldapsam)でコンパイルする必要があるため標準のSambaパッケージでは利用できない。

Samba LDAP認証

- Windowsドメイン認証やUNIXの認証がすべてLDAPで統合可能になる

